

赤川次郎

死と乙女



死
と
乙

川
次
郎

新潮社

し おとめ
死と乙女

著者／赤川次郎(あかがわじろう)

●

発行／1995年12月20日

発行者／佐藤亮一

発行所／株式会社新潮社

郵便番号162／東京都新宿区矢来町71／振替00140-5-808

電話・編集部03(3266)5411・読者係03(3266)5111

●

印刷所／二光印刷株式会社

製本所／株式会社植木製本所



●

価格はカバーに表示してあります。

© Jirō Akagawa 1995, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-338123-X C0093

死
と
乙
女

装
幀
||
宇
野
亜
喜
良

この物語は、ある一瞬を境にして、環境も時も同じなのに、まったく違った経験をする事になったふたりの、冬から夏のお話です。

25ページから始まるふたつの物語（上段と下段）のどちらの経験が、あなたの想像するふたりの真実でしょう？

も・く・じ

1 遅れた事情 7

2 対話 25

3 事件 33

4 人間関係 45

5 クリスマスの計画 58

6 返却日 71

7 秘密 84

8 クリスマス・イヴ 100

[illegible]

遅れた事情

あの人、死のうとしてる。

江梨にはそれが分った。——どうして分ったのか、と訊かれても返事はできなかったかもしれないが、ともかく分ったのである。

まず第一に江梨が考えたのは、「何とかして止めなきゃ」でもなければ、「死にたいんだっから放つところ」でもなく——。こうだった。

「どうしてそんなこと、分っちゃったんだろう？ 面倒くさいなあ」

そして、誰かにそれを押し付けられないかと思つて、あたりを見回したのである。

そりゃあ、学校帰りの電車の中でだつて、色んな人に出会う。たぶん、まだまだ仕事が山ほど残つていて、出先から帰るのもうんざりといった顔のサラリーマンとか、大方カルチャーゼンターあたりに通つて、終つた後にしつかりお茶とケーキで仲間同士のおしゃべりに興じて来た奥さん——これは江梨自身の母がそうだから、見当がつく——たち。

江梨と同じ学校帰りの女の子、男の子、小学生から高校生。大学生はお化粧にかけてはOL

にひけを取らない。

他にも、まだ暗くもないというのに、酔ってぐっすり眠り込んでいるおじさんから、中には江梨のような女子高生にはありがたくない、痴漢だっている。江梨の友だちで、同じ十七歳だというのに胸とお尻がぐつと張り出している吉本まどかなんか、毎日のようにお尻を触られるので、最近では腹を立てる代りに、

「下手くそ！」

なんて言っちゃって、相手を飛び上らせるんだとか。

まあ、江梨はそこまで慣れてもいないし、被害に遭う確率も高くない。何といっても、そう目立たないし……。

これは別にいじけて言っているのではない。

^{あやま} 梓江梨。十七歳。高校二年生。

この夕方、江梨は高校生があまり乗ることのない時間帯に、電車へ乗っていた。クラブがある子はもつと遅く、この季節ならすっかり暗くなったころの電車になるし、クラブなしで帰る子ならもつと早い時間になる。

中途半端な時間になったのは、今日が期末テストの最終日で、お昼で終り。その後、持ってきたお弁当を、江梨が空っぱの教室で食べていたら――。

「あ、江梨、いたの」

と、顔を出したのは「いつも痴漢にあう」吉本まどかで、「ねえ、ちょっと時間ある？」

嘘はつけなかった。仲のいい吉本まどかは、江梨がたいていどこにも寄り道せずに帰っていることを知っているのだ。

「うん……。ないこともないけど――」

眠くって、と言ったつもりが、

「じゃ、手伝ってよ。お願い！」

というまどかの声に圧倒されてしまって、

「うん……。いいよ」

と、答えていたのである。

「――悪いねえ」

と、まどかは床をはきながら言った。

「いいわよ」

と、江梨は「ちっとも良くない！」と思いつつ言ったのだが、江梨はいつも何かに不平があるような顔をしているので（友だちの言葉である）、本当に怒っていても、そう見てももらえないのだった。

江梨とまどかは、二人で、広い演劇部の稽古場の掃除をしている。吉本まどかは演劇部員だ

が、江梨は全く関係ない。

「頭に来ちゃうよね」

と、まどかが体を起して、腰をウーンとのぼしながら、「一、二年生は稽古場の掃除があるから残れ、って言われてさ、ちゃんと来たの、私だけよ」

「どうして他の子たちは来ないの？」

と、江梨は舞台にワックスをかけながら言った。

「今日、カンナの送別会なんだ。表向きはそういう名目じゃあないんだけど」

「カンナ？ 神田なつ子のこと？」

と、江梨はまどかを見た。

「うん。今日で辞めるって、学校」

「どうして途中で？——何かやったの？」

神田なつ子は、一年生のとき同じクラスだった。特に仲がいいというわけじゃなかったが。

「あの子、真面目よ」

と、まどかは言った。「お父さんの会社、潰れたんだって。とつても学費出せないからって」

「——知らなかった」

あんまり他人のことは気にしない江梨だったが、神田なつ子が成績優秀だったことはよく知っているだけに、少し胸が痛む。

「一応、秘密でしょ。うちの学校、そういうことを言わないじゃない」

「うん……」

江梨の通っているK女子学園高校は、誰でも知ってる、というほどの名門校じゃないが、この辺りでは結構有名だ。それにお金もかかる。

「奨学金とか、もらえなかったの」

「もらってまで通いたくなかったんでしょ。生活の方だってどうなるか。えらい借金かかえてるってことだもん」

「へえ……」

借金と聞いても、江梨にとって毎月のこづかい以上の金額には全く実感もない。

「まどか、行かなくていいの？」

「誰も掃除してないんじゃ、明日先輩に何言われるか。江梨がいてくれて良かった」

そう言われては、怒るわけにもいかず、江梨は苦笑いした。

「さ、やっちゃおう」

と、まどかがまた腰をかがめて床をはく。

江梨は、しばらく持っているのと重く感じるモップを持ち直すと、舞台にワックスをかけて行った。

「何だ。二人だけか」

と、声がして、江梨とまどかはびっくりした。

「あ——。名取先生」

と、まどかは言った。「今、掃除を……」

「どうして二人しかないんだ」

演劇部の顧問をしているこの教師は、名取といって、若いころどこかの劇団にいたこともあ
ると江梨は聞いていた。

「それに——。何だ。梓は演劇部じゃないだろう」

「ちよつと——手伝いを頼んだんです」

と、まどかは言った。

「みんな、どこへ行った。吉本一人に任せて何してるんだ」

名取がいつになく不機嫌になっているのを江梨は感じた。三十代半ばのこの教師は、この学
園の男性教師の中で唯一、バレンタインデーのチョコレートをもらう存在なのである。

「あの……神田さんの送別会をやってるんです。神田なつ子さんが辞めるって……」

「知ってる」

と、名取は言つて、「そうか」

と肯いた。

名取の表情が、急に穏やかなものになった。それは、見ていた江梨が戸惑うくらい大きな

変化だった。

「そうか」

と、名取はくり返すと、「じゃ……悪いが頑張ってくれ。ご苦労だな」

そう言つて、来たときと同様、静かに出て行つてしまった。

江梨とまどかは顔を見合せ、肩をすくめて、また掃除にかかったのである……。

江梨が、こんな半端な時間に帰りの電車に乗っているのは、そんなわけだった。

まどかと二人での掃除は、ずいぶん時間もかかったし、くたびれもしたが、下手に先輩にでもいられるよりは気が楽だった。

まどかはありがたがつて、今度、お昼をおごってくれることにもなっていた。

でも、江梨は面倒だった。別に、そんなことをしてもらいたくて手伝ったわけでもない。

むしろ放つといてくれた方がいい。でも、そうは言えないから、

「その内ね」

と言つておいた。

もう、年の暮れである。あと十日もすればクリスマスで、学校は冬休みに入る。

本当なら、浮き浮きしていてもいいころだったが……。

でもそんなときに、あの死のうとしている男の人に出会ってしまった。

そんなこと、分らなきゃ良かった。分ってしまったものは仕方ないが。

その人は——たぶん江梨の父と同じような年代だろう。五十代の半ば？　でも髪はずいぶん白くなっている。

コートに、下はきちんと背広とネクタイという格好。見たところ、会社の課長さんとか部長さんという感じで、横顔なんか知的ですらある。

でも、少しうつむき加減のその横顔に、江梨は紛れもなく、

「死のう」

という気持を読み取っていたのである……。

辺りを見回した江梨は、意外な顔を見付けることになる。

「——カンナ」

と江梨は呟いた。

カンナ、こと神田なつ子と同じ車両に乗っていたのだ。どうして気が付かなかったんだろう、と江梨は思った。

神田なつ子の送別会があったおかげで、何の関係もない演劇部の掃除を手伝わされたわけだが、まさか当の「カンナ」と帰りで同じ電車になるなんて。妙なものだ。

送別会が終わっての帰りだろう、神田なつ子は仲のいい子二人と一緒に、にぎやかにしゃべりしている。それはちよつと意外な光景だった。